

|               |   |
|---------------|---|
| Title         | ロシア語における「主語」と「主題」そして「主体」について：(1)序論  |
| Author(s)     | 林田, 理恵  |
| Citation      | 大阪外国語大学論集. 16 p.61-p.95   |
| Issue Date    | 1997-02-28  |
| oaire:version | VoR   |
| URL           | <a href="https://hdl.handle.net/11094/79716">https://hdl.handle.net/11094/79716</a> |
| rights        |   |
| Note          |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## ロシア語における「主語」と「主題」 そして「主体」について— (1) 序論

林 田 理 恵

### 《ПОДЛЕЖАЩЕЕ》, 《ТЕМА》, 《СУБЪЕКТ》 В РУССКОМ ЯЗЫКЕ — (1)

Риэ ХАЯСИДА

Традиционный русский термин 《подлежащее》, как термин 《subject》 в европейской лингвистике, прожил почтенную и долгую жизнь, но дефиниций 《подлежащего》 существует множество.

Настоящая работа посвящена исследованию соотношения между понятием 《подлежащее》 и связанными с ним понятиями — 《тема》, 《субъект》, 《агнс》. В исследовании автор пытается определить: 1) синтактико-семантические свойства элементов предложения, понимающихся под этими терминами, 2) статус этих понятий в когнитивных процессах человека, 3) их структурную и функциональную основу в процессе историко-типологической перестройки структуры языка.

#### 0. はじめに

古代, アリストテレスは, 「固有の意味に時を合わせ示すもの」としての *ῥῆμα* は, 他のものについて言われるもの *κατηγορούμενον* のしるしとしての詞を意味し, 他のものとは, 「約束によって意味をもつ音声で, 時を含まない」 *ὄνομα* が同じくそのしるしであるところの *ὑποκείμενον* であるとした [25: 86-87]。

すなわち, 真偽の値をもつものとしての命題的文は, 命題の基体的部分に当たる *ὑποκείμενον* と, それについて言われる部分 — 述語的部分である *κατηγορούμενον* との結合, あるいは分離によって成り立つとされたのである。

このアリストテレスの論理学における命題の *ὑποκείμενον* と *κατηγορούμενον* による二分法は, 現代に至るまで西欧の伝統文法における文の必須成分としての「主語」「述語」の定義にそのまま生きている。「あらゆる文 (proposition) には, それについて何かが述べられるところの主語 (subject) と, 何かについて述べられたものである述語 (predicate) とが存在する」[27:

67] として、*ὑποκείμενον, κατηγορούμενον* のラテン語訳に相当する *subjectum, praedicatum* という論理学上の用語を、最初に統語法上の文法概念として明確に定義したのは17世紀のポール＝ロワイヤル学派の『文法』であるが、それ以来、文法学の長い歴史の流れの中で、「主語」というものに対して様々な異なる概念規定がなされながらも、常に基本の部分では、多かれ少なかれ、このアリストテレスの論理学における規定が考慮され続けてきたと言えるであろう。

さて、「主語」(subject) 概念の規定がアリストテレスを出発点としながら、また一方で、言語学の歴史の中で、様々な文法学派によって、「主語」概念について多様な理解がなされてきたことも事実である。Hausenblas は、これまでの subject の定義をめぐる多様な理解について、次のような複数の概念規定としてまとめることができるとしている [34: 217]。

- 1) 文の成分としての主語、すなわち二肢文の主要成分のうちの一つ
- 2) 文の主部、すなわち主語とそれを拡大する成分からなるもの
- 3) 伝統的 (アリストテレス) 論理学におけるところの命題の二つの主要な要素のうちの第一のもの、いわゆる〈論理的主語〉
- 4) 発話の出発点、発話の現実区分におけるところの (核、レーマに対する) テーマ、いわゆる〈心理的主語〉
- 5) 行為者、動作主
- 6) 動作の担い手 (5 よりも広い概念を意味し、例えば「無主語文」における斜格で表わされるところの状態の担い手 —— 「経験者 (experiencer)」などがこれにあたる)
- 7) 多様な言語手段によって表現される発話の意味的単位としての存在する人、もの
- 8) 発話に間接的に反映される現象としての存在する人、もの

いまこの Hausenblas によってあげられた定義を大きく分けると、[1] 統語的カテゴリーとしての規定、[2] 論理的判断、命題＝文の最初の要素 —— すなわち発話の出発点という論理的主語のカテゴリーとしての規定、[3] 行為者、動作主等、言語外事実を基盤とした規定、の三つに分類することができるであろう。

英語やフランス語のような言語において「主語」といえば、英文法において「平叙文において文頭、動詞の前に来て、述語である定形動詞を機能的に支配する —— 数・人称において呼応する ——、通常主格の名詞、代名詞」[41: 2320-2328] [44: 644-645] であると規定されているように、統語的カテゴリーとしては明確な位置付けをすることができる。このような統語的カテゴリーとしての「主語」を「文法的主語」(grammatical subject) と特に限定し、一方、「主語」とは、それに関して何かが述べられる論述の「主題」であるというアリストテレス的観点から、命題の「主題」—— 実際の発話において、話し手が心理的に重点をおく話題 —— を「心理的主語」(psychological subject) と呼ぶことも一般に知られている。

こうした英語やフランス語における「文法的主語」と「心理的主語」が、どのような関係とし

て表面構造上の「主語」の中に位置付けられるのかといった問題については後に詳述することにしたが、今、本論の主要な考察の対象であるところのロシア語に限定して「主語」の規定ということを考えるとき、英語やフランス語などとは異なる、新たな、より複雑な問題が浮かび上がってくることに気づかされる。

## 1. ロシア語における「主語」( подлежащее) と「主体」( субъект)

### 1-1. 「主語」( подлежащее) と「主体」( субъект) の概念規定をめぐって

ロシア語の伝統文法において「二肢文の主要成分で、文の他の成分とは文法的に独立しており、述語によって表わされる叙述内容、特徴などの担い手としての事物を意味し、形態的には名詞の主格によって表現される」[21: 211] ものは подлежащее という用語で表わされるが、これは上記の明確な統語的カテゴリーとしての「文法的主語」とほぼ重なるものであるといつてよい。<sup>①</sup> 問題はロシア語学において、上述の подлежащее とは別に、ラテン語の subjectum を起源とする субъект という概念が存在するということである。

ロシア語学における субъект という概念については、言語の統語的側面、意味的側面のいずれを重視するか、またその異なる理解を反映する様々な立場によって、種々な概念規定がなされてきており、これまでのところ統一的な見解というものは得られていない。従来の伝統的解釈では субъект = грамматическое подлежащее (文法的主語) [21: 349] という理解もみられるが、文の意味的観点からの研究が進展するにつれ、純粋に統語的カテゴリーとして位置付けられる подлежащее と субъект は別の概念として分離して捉えられるようになってきている。

Hausenblas の subject の概念規定に関して、上で大別した三つの分類から、いま現代ロシア語学における подлежащее, субъект という両用語に関する概念規定をしてみると、подлежащее は〔1〕の統語的カテゴリーとして専ら規定されるようになってきており、〔2〕ないし〔3〕の概念を有するものとして субъект が使われているといつてよいであろう。<sup>②</sup> 上でもみたように、ロシア語学において特に文の意味構造という観点が注目されるようになってからは、Шведова の

《Субъект — это тот (то), от кого (чего) исходит действие, состояние, восприятия, отношение (в широком смысле, включая обладание) или признак》 [23: 464]

「субъект とは行為、状態、知覚、関係（所有までも含む広い意味においての）、あるいは特徴の源となる人やものである。」

という規定に代表されるように、субъект を文の「意味上の主体」、すなわち文によって表わされる —— 指し示される言語外事実としての外部世界における行為や状態等の担い手として定義

することが一般的になっている。<sup>9)</sup>

субъект を言語外事実 に立脚した文の「意味上の主体」とみる定義では、例えば

- (1) a. Саша ( $N_1$ ) не спит.  
(サーシャは眠っていない。)
- b. Саше ( $N_3$ ) не спится.  
(サーシャは (なぜか) 眠れない。)
- (2) a. Саша ( $N_1$ ) весел.  
(サーシャはゆかいだ。)
- b. Саше ( $N_3$ ) весело.  
(サーシャはゆかいだ。)

の二組の文において、それぞれ (1a) と (1b) , (2a) と (2b) は意味構造としては同一であり、(1a) と (2a) の二肢文の主格で表現されている Саша ( $N_1$ ) も、(1b) と (2b) の一肢文の与格で表現されている Саше ( $N_3$ ) も、同じくそれぞれの文の「意味上の主体」とであるとされる。このような考え方から、いわゆる「与格主体」という用語も一般的な文の意味構造が語られるときに使用されるようになってきている。しかしながら、このような субъект の定義からは、(1a) と (1b) , (2a) と (2b) の二組の文が、それぞれ同一の言語外事実を指し示しているということとは言えても、それでは何故同一の言語外事実が、このように異なる表層構造をもつ文として表現され得るのか、また言語の構造的意味の差異 — 同じ状態の担い手としての субъект が何故主格と与格という形態的に異なった形として表現され得るのか、といったような問題については何も明らかにはされ得ないのである。すなわち、文における構造的意味という問題を蔑ろにして、文の意味という問題を、いきなり言語外事実としての外部世界における真理条件的な意味関係にのみ帰してしまっているところに、このような субъект の定義の問題が潜んでいるように思えるが、以下、ロシア語学におけるこれまでの субъект の概念規定に関する主だった研究者の議論を詳しく検討していく中で、ロシア語における「主語」、**「主体」**、そしてこの二つの概念と密接にかかわって来るところの「主題」という概念について考えていきたい。

## 1-2. Золотова における「主体」( субъект ) の理解

現代ロシア語学において、文に対する伝統的な解釈による統語構造からの、「主語」、「述語」、「一肢文」、「二肢文」といった分析を排して、意味構造 (семантическая структура) を基盤として文の統語現象を再検討すべきであるということを提唱し、「主語」( подлежащее ) 概念に代り得るものとして、「主体」( субъект ) 概念というものを大きくクローズアップしている代表的論者に、Золотова [7] [9] [10] [11] を挙げることができる。

Золотова は、

《структуру ситуации ... мы представляем лишь так, как она отражена в нашем языковом сознании》 [10: 17]

「状況の構造というものを、我々はそれが、我々の言語認識に反映されたものとしてのみ理解するのである」

として、外部世界における真理条件的な意味内容が、直接言語の表現形式に反映されるわけではなく、人間の認知能力というフィルターを通したものとして反映されるのである、ということを明記しつつ、文の表層的な構造上の特徴を、形式と意味内容の一体化したものとして分析しようと試みている。そこではまず、文の主要な成分は、叙述特徴の担い手を表現する成分と叙述特徴そのものを表現する成分であるとして、従来、文の主成分とされてきた「主語」(подлежащее)、「述語」(сказуемое) という概念を斥けている [10: 102-103]。

同一の言語外事実を指し示しながらも、異なる表現形式をもつようなパラフレーズ関係にある複数の文については、「共通の意味タイプ」(общее типовое значение) をもつものとして理解され、例えば、(2a)や(2b)のような二文についても、「主体とその状態」(субъект и его состояние) という「共通の意味タイプ」に対する異なる表現形式であると理解されるのである [7: 25-26, 231]。そして、(2a) と (2b) における表層的な構造上の差異 —— 一枝文であるか二枝文であるか、主格で示される「主語」が存在するか否か —— は、単なる意味的、文体的ニュアンスの差によってもたらされるものであり、このような二文の文の分析にとって本質的なことは、先に挙げた「主体とその状態」という意味タイプであり、表層上の構造的差異は、文の分析にとっては非本質的なものであるとされてしまっている [7: 231-233] [10: 121]。

さらに、その意味タイプの規定で用いられている「主体」(субъект) についても、語の一定の形態によって意味されるところの、指示される状況における行為、状態、特徴の実際の担い手であるとされ [7: 27]、結局のところ、指示対象の外部世界におけるところの実際的な役割、真理条件的な意味がそこに一義的に投射されているということが分かる。

Золотова は上述のような立場から、さらにロシア語のいわゆる「無人称文」についても、無人称＝無主体ではないとして、そこに「主体」の存在というものを認めつつ、他方、「無人称文」における独自の文の構造的意味 —— 「不随意的行為や状態、主体の意志から独立した状態の意味」(значение произвольности действия или состояния, независимости его от воли субъекта) —— というものについても言及している [10: 112-113, 118, 120]。

例えば、

- (3) a. Он тоскует. (N<sub>1</sub> V<sub>3n</sub>)  
           (彼はゆううつがっている。)  
       b. Ему тоскливо. (N<sub>3</sub> Pred<sub>n</sub>)

(彼はゆううつだ。)

の二文において、(3b) の無人称文は、(3a) の人称文と比較した場合、「主体の意志から独立した状態」であるということをマークしているとされる [10: 106]。

また、

(4) a. Град побил посевы. ( $N_1 V_{past\ m} N_4$ )

(雹が種まきした畑をだめにした。)

b. Градом побило посевы. ( $N_5 V_{past\ n} N_4$ )

(雹で種まきした畑がだめになった。)

のような非生物を「主体」とするようなパラフレーズ関係にある文においては、「主体」が主格に立つ (4a) と造格に立つ (4b) で、指し示される言語外事実が自然現象的なもの、不随意的なものであるかどうかという点に関して、意味的、文体的ニュアンスに差がでるとしている [7: 167]。

このようにみえてくると、Золотова においては、外部世界における真理条件的な意味内容が、直接言語の表現形式に反映されるわけではなく、人間の認知能力というフィルターを通したものととして反映されるということが前提として提示されながらも、言語現象の具体的な記述、分析を進めていく際には、この外部世界における真理条件的な意味内容のレベルと、人間の認知能力における概念化のレベルの問題が明確に区別されず、ある場合には混同されて、「主体」(субъект) = 語の一定の形態によって意味されるところの、指示される状況における行為、状態、特徴の実際の担い手という規定がなされ、またある場合には、同一の状況に対する異なる概念化、構造化を反映している文の表層上の構造的差異、語の形態的差異は、単なる文体的、状況的差異としての「意味的ニュアンスの差」という地位におしやられ、文の構造的分析にとっては非本質的なものであるという規定がなされるのである。

しかしながら、Золотова のいうところの、形式と意味の一体化したものととしての文の理解と分析、ということを目指すためには、まさにこの文の表層上における統語的、形態的な差異というものに着目して、それが、「同一の言語外事実を指し示す」ということをいうのではなく、何故その差異がもたらされるのかということが詳細に検討されなければならないのである。

### 1-3. Кокоринаにおける「主体」(субъект)の理解

Кокорина における субъект の定義は、基本的にはアリストテレス的解釈を踏襲したものとになっている。

«Семантический субъект и предикат — также понятия соотносительные. Их наличие связано с возможным расчленением семантической структуры предложения на два состава. ... Отсюда принципиальная возможность объективировать расчленение семантической

структуры предложения на два состава путем соотнесения его информативного содержания с определенной логической единицей. В качестве такой единицы выступает суждение в аристотелевской логике, т. е. «высказывание, утверждающее или отрицающее что-либо о чем-либо».》 [15: 11]

「意味上の主体と叙述語もまた相関関係にある概念である。それらの存在は、文の意味構造が二つの部分に分けることができるということによって支えられている。(…) 原則的には、文の伝達内容にある一定の論理的単位と相関させることによって、文の意味構造を二つの部分に分けることが客観的に可能になる。そのような単位として浮び上がってくるのがアリストテレス論理学における命題、すなわち『なにかあること [甲] をなにかあるもの [乙] について肯定したまたは否定する陳述 [表現形式]』である。」<sup>(4)</sup>

簡約すれば、言語の伝達内容は、それが命題である限りにおいて「何かについて」「何かを述べる」という二つの部分に分けることができ、「意味上の主体」とはとりもなおさずこの「何かについて」の部分、すなわち叙述の対象となる部分であるということである。このような理解に基づいて、

- (5) Ему холодно. ( $N_3 \text{ Pred}_n$ )  
(彼は寒い。)
- (6) Его лихорадит. ( $N_4 \text{ V}_{3n}$ )  
(彼は寒気がする。)
- (7) Об этом писалось. ( $o \text{ } N_6 \text{ V}_{\text{past } n}$ )  
(それについては書かれている。)

などのいわゆるロシア語の「無人称文」について、холодно, лихорадит, писалось といった叙述内容の担い手 (носитель предикативно выраженного признака) は ему ( $N_3$ ), его ( $N_4$ ), об этом ( $o \text{ } N_6$ ) によって具現されているとして、このような一肢文での「意味上の主体」の存在を認めている。

Кокорина は、文の意味構造を〔1〕言語外事実 に立脚した指示的意味 (денотативное значение), 〔2〕概念的意味 (сигнификативное значение), 〔3〕統語的意味 (синтаксическое значение) の三つのレベルに分けて考察している。Daneš の記述に基本的に賛同している。そこでは、〔1〕の指示的意味と〔2〕の概念的意味はある面で相関関係にあり、時に一致するが、決して同一のものではなく、例えば、

- (8) а. Дом строится рабочими.  
(家は労働者たちによって建てられている。)



b. Рабочие строят дом.

(労働者たちは家を建てている。)

の二つの文は、その指示的意味は同一であるが、概念的意味は異なり、(8a) の「意味上の主体」は дом であるのに対し、(8b) の「意味上の主体」は рабочие であるとされている [31]。

Юкороина の議論の中で特徴的であるのは、上述のように文の意味構造を分析する際に、指示的意味、概念的意味、統語的意味の三つのレベルを明確に区別し、さらに、具体的な文の意味構造は概念的意味と統語的意味が複雑に一体化したものとして考察されねばならないと主張している点である。すなわち、基本的に「意味上の主体」とは、叙述内容の担い手であるとしても、その項が文の構造上どのような統語的役割を担っているかという文法的な意味関係が、その「主体」の認定、もしくは「主体」と認定された場合でも、その意味内容に複雑に影響を与えるというのである。上でみた (5) ~ (7) の各文についても、一肢文という構造的枠組それ自体は、述部で表現されている叙述特徴が、特にその担い手の存在を前提としないという文法的意味関係を具現化しており、その意味でこれらの一肢文における「意味上の主体」は、能動的な動作主としての意味はもっておらず、すなわち文法的に非動作主性 (деагенси́вность), 脱能動性 (деза́ктивность) ということがマークされているとしている。

以上のような前提に立って、言語外事実としては同一の事象を指し示しながら、文としては構造的に異なるいくつかのタイプで表現される場合についても、以下のように考察が続けられる。

(9) a. Ночь холодна. (N<sub>1</sub> Cop Adj)

(夜は寒い。)

b. Ночью холодно. (Cop Pred<sub>n</sub>)

(夜は寒い。)

(10) a. Комната грязна и смрадна. (N<sub>1</sub> Cop Adj)

(部屋は汚くて、悪臭がする。)

b. В комнате грязно и смрадно. (Cop Pred<sub>n</sub>)

(部屋の中は汚くて、悪臭がする。)

(11) a. Все живут радостно. (N<sub>1</sub> V<sub>эп</sub>)

(みんな喜びに満ちた人生を送っている。)

b. Всюду радостная жизнь. (Cop N<sub>1</sub>)

(いたるところ、喜びに満ちた人生がある。)

まず、上の (9) ~ (11) のそれぞれ a, b の文は、同一の言語外事実を指し示しており、その意味で同一の指示的意味をもつとされる。しかしながら、(9a) や (10a), (11a) がいわゆる二肢文となっているのに対し、対応する (9b) と (10b), (11b) の各文では、同じ事実内容が一

肢文で表現されており、Кокорина によれば、その統語的な成り立ちの差は、それぞれの二つの文の概念的、統語的意味の差に反映するとされる。具体的には、(9a) と (10a), (11a) において文の「意味上の主体」は、実体 (субстанция) という構造的意味を担う  $N_i$  という形で提示されている *ночь, комната, все* であり、一方、(9b) や (10b), (11b) の文では *ночью, в комнате, всюду* はそれぞれ時や場所を示す語としての形態的マーカーを担っており、ここではもはや実体から状況 (обстоятельство) を表わすものとして、その概念的、統語的意味を変更し、従って、(9b) と (10b), (11b) の文では文の「意味上の主体」は存在しないとされる [15: 13-18]。<sup>(5)</sup>

一方、統語的構造としては上の (11b) と同一であると思われる次の二文については、別の解釈をおこなっている。

(12) В Наташе много непосредственности. (Cоп  $N_i$ )

(ナターシャにはとてもひたむきなところがある。)

(13) Между ними была большая любовь и большая отчужденность.

(Cоп  $N_i$ )

(彼らの間には大きな愛と、とてもよそよそしいところがある。)

(12) と (13) の *в Наташе, между ними* は統語的には (9b) や (10b), (11b) の *ночью, в комнате, всюду* と同じく状況項としてその構造的意味は場所を表わすものと思われるが、Кокорина にあっては (12) と (13) の二文の場合には、*в Наташе, между ними* は「主体」—— 状況の両方の意味があいまいに重なりあったもの (диффузное обстоятельственно-субъектное значение) [15: 35] として理解されている。

それでは、例えば (10b) の *в комнате* が専ら場所の状況項として理解されるのに対し、(12) の *в Наташе* は、たとえあいまいではあっても「主体」の意味として何故理解されるのであろうか。Кокорина は次のように述べている。

《Наличие субъектного значения связано с лексической семантикой распространителя: он реально не обозначает места.》 [15: 34]

「主体の意味の存在は拡大成分 (ここでは *в Наташе, между ними* を指す —— 筆者註) の語彙的意味と結びついている。すなわちそれは現実には場所を意味しない。」

つまり、*в Наташе* が「意味上の主体」であるという事実を支えているのは、*Наташа* という語の意味 —— *Наташа* という名で呼ばれている具体的な人間の女性 —— ということになり、(12) と (13) の二文の分析では、Кокорина のいうところの指示的意味が基準とされて「意味上の主体」というものが定義されていることになる。このように、「主体」というものの定義におい

て、前提としては文の指示的意味に直接結びつけることに反対し、文の構造的意味（*Кокорина* のいうところの統語的意味）を重視しなければならないとしながらも、具体的な個々の文における「主体」の認定にあたっては、やはり言語外事実に立脚した指示的な意味関係に依拠するという自己矛盾に陥る結果となっているのである。

ところで、*Кокорина* における「主体」の基本的定義は、すでに述べたように、文というものが基本的には「何かについて」「何かを述べる」という二つの部分に分けられ、そのうちの「何かについて」という部分がとりもなおさず文の「主体」となるということであったが、この *Кокорина* の考えは、

《Семантический субъект по линейному расположению предшествует семантическому предикату, как в суждении логический субъект предшествует логическому предикату.》 [15: 21]

「命題において論理上の主体が論理上の叙述内容に先行するように、意味上の主体は線形配列上、意味上の叙述部に先行する」<sup>(6)</sup>

という記述により明確に打ち出されている。例えば、

- (14) Ему снился сон. ( $N_3 V_{past\ m} N_1$ )  
(彼は夢をみた。)
- (15) Ему нравится Москва. ( $N_3 V_{3s} N_1$ )  
(彼はモスクワが好きだ。)
- (16) Его охватила тоска. ( $N_4 V_{past\ f} N_1$ )  
(彼はふさぎの虫にとりつかれた。)

の三つの文では、ニュートラルな語順においてすでに「文法上の主語」( $N_1$ ) は述語に後置されている。これらの文の命題内容は、例えば (15) では「叙述されるもの」は *ему* で具現化されている「彼」であり、一方「叙述するもの」は述語と文法的主語 (*нравится Москва*) で具現化される「モスクワが好きだ」の部分となり、従って、この場合の「意味上の主体」は叙述部に先行する与格で表わされている代名詞 *ему* になるとしている。

このように二肢文において、何故「文法上の主語」が述語に後置される文というものが存在するかについては、このような文においては各名詞のもつ伝達情報量が異なり —— 具体的な人やものを表わす情報量の低い名詞と、特徴などを表わす情報量の高い名詞 ——、情報量の低いものが「意味上の主体」となり、情報量の高いものが動詞とともに叙述部となって、線形配列上、情報量の低いものから高いものへという順で配置される、としている [15: 23]。また、*Кокорина* は上述の考察に続いて以下のようにまとめている。

《В минимальном построении, в контекстуально независимом, немаркированном высказывании семантический субъект — всегда тема, а семантический предикат — рема.》[15: 24]

「発話の、その最小の構成において、かつ文脈に左右されない無標の状態における発話においては、意味上の主体は常にテーマ（тема）であり、一方意味上の叙述部はレーマ（рема）である。」

この論拠は、ブラーク学派における「機能的構文論」(Functional Sentence Perspective) の名で呼ばれている観点——発話はメッセージ（伝達内容）の出発点としての「テーマ」(theme) と、その「テーマ」について何かを述べる「レーマ」(rheme) の二つの部分に分けて分析できるが、発話の各要素は、それらの担う情報上の価値の重要度に応じて、情報量の比較的少ないものから次第に情報量の高いものへという順で線形的に配置される——と大きく重なるものであることは明白であり、*Кокорина* のいうところの「意味上の主体」とは、結局のところ「機能的構文論」での「テーマ」と同一のものであるということになる。しかしながら *Кокорина* はすぐ後に続けて、「意味上の主体」は常に「テーマ」であるが、その逆、「テーマ」は常に「意味上の主体」であるとは言えないとしている [15: 24]。それは、(9) ～ (14) の各文の分析の際にふれているように、「テーマ」として発話の文頭に位置する要素であっても、その語の語彙的意味が、実体（субстанция）に対立するものとしての特徴（признак）や状況（обстоятельство）を意味する場合で、文法的にも状況語としての形態的マーカーを受けているときには、それらの項は「意味上の主体」としては認定できない、という事情によっているものと思われる。

以上、*Кокорина* において、「意味上の主体」という概念がどのように規定されているかを詳しくみてきたが、簡潔にまとめるならば、そこでは「意味上の主体」とは、基本的には発話の組織の問題としての、発話の出発点たる「テーマ」とほぼ重なりあうものであるが、個々の具体的な文における「主体」の認定については、表層レベルでの文の構造がもつ文法的意味や、当の語そのものがもつ語彙的な意味がそこに複雑にかかわってくる——つまり、「テーマ」の中で、特定の文法的・語彙的意味（実体（субстанция）という概念で捉えられているが）を担うもの、ということになるであろう。

確かにことばというのは、その表現対象とされている言語外事実の存在に依拠して組み立てられる真理条件的な意味内容——深層レベルでの意味構造——と、それをコード化する際に守るべき各言語固有の文法的な約束事——表層レベルでの文法構造——、そして話し手が「何について」述べようとするか、何を出発点として発話を組み立てるか、という発話の組織のレベルが複雑に絡み合った結果としてでき上がってくるものであり、その異なる三つのレベルが、一つの発話という現象の中のどのような位置で、どのような影響を与えてくるのかを探ることによって、発話というものの真の姿がみえてくることになる。しかしながら、そこではまず分析の手順として、それぞれのレベルにおいて、発話というものを成り立たせる上でどのような要素が、どのような役割を担っているのか、そして要素間の関係としてどのような約束事があるのか、とい

うことを詳細に検討することから作業を始めなければならない。その上で、それらの三つのレベルにおける諸現象がどのように影響を与えながら、一つの文という一体化したものとして具現化されるのか、ということが初めて語れるのである。

ロシア語における「文法的主語」というものも、これまでの議論から確かに言えることとしては、「通常、名詞（相当語句）の主格で表わされ、述語と数、人称において呼応する」という、あくまで文法構造のレベルでの一定の性質を示す単位——範疇ということであり、その意味で、文法構造のレベルにおける諸現象を分析する際の重要な単位として意味をもってくるのである。「意味上の主体」というものについても、もしそれを何らかの意味で分析の単位として位置付けたいのであれば、その概念を規定するにあたって、まずどのレベルにおける単位であるのか、そしてそのレベルにおいてどのような一定の性質をもったものとして規定されるのかが明示されねばならないであろう。Кокорина のように、個々の場合で、レベルの異なる諸現象によって、ad hoc な説明付けがなされるようでは、それは分析の単位としては何の役にもたたないし、またそのような単位を使った分析では、各レベルがどのように影響を与えあって文というものが作り上げられているかということは、全くみえてこないのである。

以上、ロシア語における「主語」(подлежащее)、「主体」(субъект) という用語の概念規定をめぐる主だった見解について概観してきたが、それぞれの論者の規定からはおおむね、まず通常、名詞（相当語句）の主格で表わされ、述語と数、人称において呼応するという、統語的カテゴリーとしての「主語」、そして言語外事実の存在に依拠して組み立てられる、真理条件的な意味内容としての行為、状態の担い手を表わす「主体」、さらに、発話組織における、その出発点としての「テーマ」、という三つの概念が浮び上がってきたように思う。

いまここで、そもそもこれらの概念が、何らかの整合性をもった分析の単位として規定され得るのかどうか、ということから再度原点に立ち返って問題を立て直そうとすると、とりあえず前提としてみていかなければならないいくつかの問題が存在するだろう。

## 2. 「主題」概念について

### 2-1. 主題—論述構造と情報構造

まず第一に論ずべきは、これまで述べてきたなかでの「テーマ」という概念についてであり、聞き手の観点を考慮した「新——旧情報」の概念を基礎とする情報構造との絡みも含めて、この「テーマ」という概念そのものの規定を整理し直す必要があろう。

例えば日本語において西欧文法の「主語」に該当する特性は、性格付け文における「主題」と、事象伝達文における「動作主」という二つの範疇にはっきりと分かれ、それぞれ異なる形で文法化されているということは、最近の研究においてはほぼ共通認識となっている。

一方、文における情報の配列が、発話や文全体の流れに対して、伝達機能上どのような役割を果たすかという視点による「文の現実区分」の研究は、プラーグ学派の言語学の構文分析の一つの基盤をなすものであり、Mathesius が理論的基盤を作り、Firbas, Daneš などにより、論の発展をみている。

Mathesius によって提唱された「機能的構文論」では、すでにみたように、文はメッセージ（伝達内容）の出発点としての「テーマ」（theme）と、その「テーマ」について何かを述べる「レーマ」（rheme）の二つの部分に分けて分析できるとされたが [36] [37] [30] [29]、そこでは、「テーマ」とはしばしば聞き手や読み手にとって既知のこと、または情報量の少ない旧情報を担う部分であり、一方「レーマ」は、聞き手や読み手にとって未知のこと、情報量の多い新情報を必ず含むといった記述がなされている。<sup>7)</sup>

このように、プラーグ学派の「機能的構文論」の初期の理論においては、話し手側の「何をメッセージの出発点にするか」という観点による文のありようとしての主題－論述構造と、主に聞き手の観点を考慮して、情報の新旧によって配列される文の情報構造とが事実上同一視され、「テーマ」、「レーマ」という概念そのものの明確な定義がなされぬままに、それ以降、機能的構文分析の諸理論が発展する過程において、「テーマ」＝旧情報、「レーマ」＝新情報なる単純化された理解さえ生み出すに至っている [1] [38] [28] [20] [8]。

さて、「何かについて何かを述べる」という文の分節構造——二項性は、世界に有るもの、経験されるものの理解として、その意味を伝達する際に具体的な文として現れる、人間の基本的な認識構造の反映に他ならない。言語外事実としては共通の対象的内容は、文の各項の「論理的格関係」として、文の表現形式上ある程度反映されるものの、その同じ対象的内容に対して、話し手がその事柄をどう分け結んで相手に伝えるか、いかなる分節を行い、どのような二項として相手に伝えるかということによって、具体的な発話、表現の段階における話し手の意識としての「表現上の断続関係」<sup>8)</sup> は異なってくる。以下の議論においては、これまで曖昧な定義しかされてこなかった「テーマ」、「レーマ」という用語は避け、文の「表現上の断続関係」を主題－論述構造として捉え、その前者を「主題」、後者を「論述」と呼ぶことにする。

このようにみると、アリストテレス以来、ポール＝ロワイヤル学派の『文法』を経て、西欧の伝統文法において、一貫して受け継がれてきた命題の二項性と、そこにおける「それについて何かが述べられるところの主語」と、「何かについて述べられたものである述語」は、実は、「表現上の断続関係」におけるところの「主題」と「論述」として、「通常、名詞、代名詞の主格によって表現され、述語である定形動詞を機能的に支配する」という統語的カテゴリーとしての「主語」とは明確に区別して捉えることができる。

この話し手の意識としての「表現上の断続関係」——すなわち、話し手の話題に関しての方向づけ——は、実際の発話場面においては、先行する談話に依存した共起場面によって修正が加えられる。というのも、伝達という意図をもって発話行為が行われる際、意図された情報が相

手に伝わりやすい形にするという配慮が当然払われる。そこでは、話し手の意識としての「表現上の断続関係」に、情報構造が覆いかぶさっていくのであるが、情報構造それ自体は、聞き手にとって情報量の低い（と話し手が判断する）旧情報を前提条件として、聞き手にとって新しい情報であると考えられる新情報が付加されていく、という即応的軌道修正の反映として捉えられるものである。特に、微妙な情報構造上の変化が文の語順配列に影響を与えるロシア語においては、日常言語の発話における話し手の意識としての「表現上の断続関係」である主題－論述構造は、多くの場合、聞き手の観点を考慮した情報の新旧による旧情報－新情報という語順配列として実現される情報構造と一致し、「主題」＝旧情報、「論述」＝新情報という図式が成立する。

かといって、それでは主題－論述構造と情報構造を同一視できるかということ、決してそうではない。

日常言語の発話においては、外部世界の事象の伝達であれ、また欲求や考えの表明という抽象的次元の内容の伝達であれ、それらの形のない認識、観念を、言語記号という形あるものへとコード化し、線形上に配列していくという作業が行われなければならない。そのコード化、線形化の作業において、まず外部世界における真理条件的な意味と、以下で詳述する、それをいかなる視点から、どのような概念枠にあてはめて認識するかという、人間の認知過程による制約がはたらく。これらの制約の上にさらに、それぞれの個別言語に特有の統語規則による制約がはたらいて、実際の記号化、線形化の作業が行われるのである。

このようにして、意味レベル、認知レベルの制約に動機づけられ、表現形式としては、個別言語に特有の統語構造にのっとって得られた線形構造は、実際の発話場面においては、そのままの形として表現されるのではなく、そこにさらに文脈、先行談話に依存した共起場面による修正が加えられることになるのである。多くの場合、その修正によって統語規則にのっとった語順配列から異なる語順配列へと並べ換えがなされたり、また、音調の核の移動が行われるのであるが、問題は、そのような修正が加えられない形のままで、一定の共起場面对応しているという場合も当然考えられるということである。典型的な例としては、共起場面にはほとんど左右されない定義文やことわざ、さらには特定の個人ではなく、不定の集団を対象としたニュースや通達などの告知文、語りや物語の冒頭部分がそれにあたる。このような場合には、文法上の規則に従って並べられた語順配列がそのまま発話として成立するわけで、いわゆる無標の文構造として理解される場合である。

日常言語の多くの発話では、話し手の意識としての主題－論述構造は、共起場面の脈絡によって聞き手の観点を考慮した情報の新旧の度合による修正を受け、情報構造の覆いがかけられた形で、旧情報を「主題」に、新情報を論述部にもっていくという語順配列で実現されるということを上でみてきたが、それでは共起場面にはほとんど左右されない、従って、聞き手の観点、聞き手にとっての情報の新旧という問題を考慮する必要のない無標の文構造においては、主題－論述構造はどのように決定されるのであろうか。

- (17) Ветер теплый.  
(風は暖かい。)
- (18) Словарь мой.  
(辞書は私のだ。)
- (19) a. Наташа характеризуется высокой требовательностью к себе.  
(ナターシャは自分に対して非常に厳しい。)
- b. Высокой требовательностью к себе характеризуется Наташа.  
(自分に対して非常に厳しいのはナターシャだ。)

(17), (18), (19a) の文はいずれも人やものの性質、特徴について述べている文として理解されるが、これらの文においては、属性の担い手を表わす名詞句が「主語」として文頭に位置し、その属性を表現する部分が述語として後置されている。(17) と (18) のような、形容詞や所有代名詞が名辞述語となる文においては、先行文脈の如何にかかわらず、常にこの語順になり、語順を変えると文ではなく、теплый ветер (暖かい風), мой словарь (私の辞書) という単なる語結合としてしか理解されない句になってしまう。

(19a) の文も、特定の先行文脈がない場面における発話としても十分理解できる、無標の文構造をもつ文として捉えることが可能である。一方、(19a) の主語を文末に移動した (19b) は、特殊な共起場面の下でのみ成立可能な文であり、その意味で、聞き手の観点を考慮した情報構造に左右されてその主題—論述構造が決定された文として理解でき、また、Наташа についての特徴を述べた属性規定文としての (19a) とは命題内容そのものが異なっている。すなわち、(19b) の文は、ある特徴や資格をもつものの集合の中から、問題となっている共起場面においてその特徴、資格をもち得る個体を指定する、という同定文の意味内容をもつ文として理解されるのである。属性規定文、同定文についての話し手の認知プロセスの違いと、それを反映した表現形式上の文としてのふるまいの違いについては、次稿以降詳しくみていくことになるが、とりあえずここでは、(17) や (18), (19a) のような属性規定文は、その意味内容を変えることなく語順を変更するということとはできない、ということのみを強調しておきたい。

さて、このようにみてくると、ロシア語において、一般に人やものの性質、特徴を述べるような文では、先行文脈の如何にかかわらず主格に立つ「主語」が「主題」として文頭におかれ、「述語」が「論述」として後置される、ということが言えそうであるが、それでは果たしてこのような文構造が属性規定文全体の一般原則として、あらゆる場合にあてはまるであろうか。次の (20) と (21) の例をみてみよう。

- (20) a. Наташу характеризует высокая требовательность к себе.  
b. Высокая требовательность к себе характеризует Наташу.
- (21) a. Ребенку свойственна доверчивость.



(子供というものは信じやすいものだ。)

b. Доверчивость свойственна ребенку.

(信じやすいのは子供だ。)

(20) と (21) のそれぞれの文で、属性規定文として理解されるのは (20a) と (21a) の方であり、(20b) と (21b) は、(19b) の場合と同じように、特殊な共起場面の下でのみ成立可能な同定文である。ところが、「主題」として文頭位置におかれているのは、(19a) の場合には主格によって表現される統語上の「主語」であるのに対し、(20a) と (21a) では、それぞれ対格、与格で表現される統語上の補語となっている。すなわち、「主語」=「主題」、「述語」=「論述」という上でみた文構造は、ロシア語の属性規定文全体にあてはまる原則ではないということになる。とすれば、話し手が文の出発点として選ぶべき「主題」は、どのようにして話し手の意識において決定されるのであろうか。

それは、Hagège がいうところの「『発話者』の共感度の領域や各言語の宇宙観のなかにおける『発話者』やそれ以外のものの占める位置」[33: 64] と密接な関係をもっていると言えるのではないだろうか。一般に話し手は、自分自身とその領域に属するもの、聞き手、第三者の人、動物、もの、自然力、抽象的事象や地名の順で共感を感じ、それが話題になりやすさの度合として主題－論述構造にも反映するのである。(20a) や (21a) の文が、特定の先行文脈がなくとも属性規定文として自然な語順の発話と理解されるのも、それぞれの文で、人間を指示する名詞句 (Наташа, ребенок) と抽象的な概念を表わす名詞句 (требовательность, доверчивость) が存在している場合に、それぞれの統語的な役割如何にかかわらず、「主題」としてより話し手の領域に近い人間を指示する名詞句が選ばれている、という事情によるものである。このように、話し手によって何が「主題」として選ばれるかについては、情報の新旧の度合という問題以前に、話し手の共感度に従った概念間の優先的序列構造がそこに大きく反映しているのであり、主題－論述構造と情報構造は異なる次元の観点として、はっきりと区別して捉えなくてはならないということの由縁も、このあたりの事情にひそむものである。

## 2-2. 有題文と無題文

ところで、主題－論述構造と情報構造とのかかわりの問題に関連して、ここで、いわゆる無題文と呼ばれる文のタイプについてもみておかなければならないだろう。

人間がある事柄を文として表現し伝達しようとする際、話し手はまず外部世界の中から有意義な断片としてひとまとまりの内容をとり出し、概念化するわけであるが、その概念化の過程には、基本的に二つの異なるタイプを見出すことができる。このことは、すでにふれるところのあった、日本語文法の研究史においてかなり以前から存在していた、叙述の型としての文のタイプの二分法の考え方につながるものであるが、まず第一のタイプとして、性格付け文とでもいえるタイプの

文が存在する。<sup>9)</sup> このタイプの文では、話し手はまず、外部世界に属する個体（具体的、抽象的事物）を対象としてとり上げ、それに関する性格付けや分類などを自らの経験の中から導き出して、知的判断を下すという概念化が行われる。一方、行為——ここでの行為とはいわゆる自動詞的なものも含めて、広い意味で捉えたものである——や一時的状態を伝達する文の中には、外部世界のある限定された時空間に存在したり、出現したりする事象を、そのまま伝達する、事象伝達文ともいうべきタイプが存在する。第一のタイプの性格付け文では、話し手は判断の対象である事象の中からある個体を選び出し、それに対して経験的判断を下す、という明らかな二項性が顕在しているが、第二のタイプ、事象伝達文は、よく例として用いられる「雨が降っている。」「風が吹いている。」などの文からもわかるように、眼前に展開する事象の生起をそのまま描写しており、雨について、または風について、何らかの判断を下し、述べるという二項性はそこに存在しない。そこでは、事象の生起にどのような個体がかかわるか、そしてそのかかわり方がどのようなものであるかといったことは、基本的には外部世界のありようそのものに依拠しているものであり、話し手が恣意的に選び出したり、判断を下したりするべきことではないのである。

以上のことから明らかなように、性格付け文は基本的に主題—論述構造という二項性をもつ文として、話し手によって選出された——特定の共起場面がある場合には、その場面に依存して「主題」の決定がおこなわれ、また特定の先行文脈がない下では、すでに述べたように話し手の共感度による概念間の優先的序列構造によって、「主題」が選出されるのであるが——個体が「主題」として文頭に位置するのが常である。これまでみてきた (17) から (21) の文もすべて、性格付け文として「主題」が文頭位置におかれているのである。

一方、事象伝達文は、そのような二項性をもたない、事象全体を一つの項として捉える文として一般に無題文と呼ばれ、ロシア語においても, Дует ветер. (風が吹いている。), Прилетели птицы. (鳥が飛んで来た。) などのように、主に人やもの、事柄の存在を情報として伝達する文は、同様に無題 (нулевая тема) 文、または非分割文 (нерасчлененное высказывание) という扱いをうけている。

ところで、性格付け文が常に「主題」を有する有題文であるのに対して、行為や一時的状態を伝達する文を全体として考察してみると、これらの文では、ある場合には、例えば「雨が降っている。」に対する「雨は降っている。」「風が吹いている。」に対する「風は吹いている。」のように、すでに先行文脈の中で話題になっているある個体を取り出し、それがどのような状態にあるかという判断を下す、という主題—論述構造を有する有題文になり、またある場合には、上でみてきたように事象伝達文として、無題文のふるまいをみせるのである。

(22) a. Виктор читает книгу.

b. Книгу читает Виктор.

(22a) の文は、「ヴィクトルは本を読んでいる。」というように、Виктор に関する話し手の

判断を述べている有題文としても理解できるし、また、眼前に生起している事象をそのまま描写した、「ヴィクトルが本を読んでいる。」といった意味の文として、事象伝達文、すなわち無題文としても理解できる。

ロシア語ではこれまで無題文といえ、すでにみたように人やもの、事柄の存在そのものが情報として伝達される文が一般的であり、そこでは、Прилетели птицы. Дует ветер. のようにV-S語順になるということが言われてきている。このような存在文そのものの文構造の問題については、次稿以下で詳述することになるが、とりあえずここでははっきりさせておかななくてはならないことは、存在文だけが無題文ではなく、(22a)のような一般的な行為、一時的状態を表わす文でも、共起場面によっては有題文にも無題文にもなり得るという事実である。

さて、(22a)が有題文として発話される場合には、Виктор が先行文脈においてはすでに何らかの意味で話題となっており、その旧情報としての Виктор が発話の出発点としての「主題」として、文頭位置を占めていると考えられる。<sup>(40)</sup> 一方、異なる共起場面において、「本を読んでいるのは誰か。」、あるいは「その本はどうしたのか。」といったことが聞き手の関心としてある場合には、(22b)の文が発話され、やはり旧情報としての книгу читает あるいは книгу の部分が文の「主題」として選ばれ、文頭に位置することとなる。それでは(22a)が無題文として発話された場合、情報構造としては文全体が新情報ということになるが、そこでの語順、Виктор の文頭位置というものはどのように理解されるのであろうか。

すでに性格付け文においては、話し手が選び出したある個体——「主題」について、経験的判断を下す——「論述」という、主題—論述構造が文の基本構造であり、命題の出発点、中心的要素として「主題」が文頭位置におかれるということを見てきたが、ある個体の行為全体が一つの事象として描写されるような文において、(22a)のように主格に立つ「主語」が文頭位置を占めるという現象は、上の有題文における「主題」の文頭位置という現象とは、根本的にそのあり方が異なるものとして理解されよう。

そこではまず第一に、叙述全体が新情報として理解されるのであるから、情報の新旧という問題が語順決定にかかわっていないことは明らかである。さらには、事象全体の描写であるからには、そこでは有題文のように二項の設定、「何かについて何かを述べる」という構造は存在し得ない。それでは何故主格に立つ「主語」が文頭位置を占めるかといえ、そこには、「主語」における中心的概念の一つである「動作主」という概念との関連性が浮び上がってくる。それは事象の生起ということが語られる場合に、その事象の根源的な要因としての「動作主」が文の中心軸として把握され、事象を引き起こす契機として、事象の展開をいわば図像的に映しとった形として、文頭位置におかれるのである。人間中心にできている言語においては、「動作主」とは典型的には人間であり、そこに明確な動作性——「動作主」とその意志によって引き起こされる知覚できるエネルギーの流れとしての動作——が表現される場合には、有標の情報構造がかぶせられない限り、人間である「動作主」が「主語」となり、文頭位置を占めるのである。しかし

ながら、同じように明確な動作性が表現されている文においても、事象の生起に二つ以上のものが関与し、「動作主」が非人間、「対象」や「受け手」、「経験者」などが人間である場合には、事情は異なってくる。

(23) a. Мою дочь укусила собака Петра Васильевича.

(私の娘はピョートル・ワシーリエヴィッチの犬にかまれた。)

b. Собака Петра Васильевича укусила мою дочь.

(ピョートル・ワシーリエヴィッチの犬は (が) 私の娘をかんだ。)

(23a) と (23b) の二文を比較して、Селиверстова и Прозорова [22: 227] では、ほとんどの条件下において (23a) の方がより自然な発話として好まれると述べられているが、(23a) の文というのは、眼前に生起した外部世界の事象としては、確かに собака の動的行為なのであるが、話し手の認知レベルでは、мою дочь が判断の対象たる事象の中心的存在物として捉えられており、мою дочь について、そのありようとしての状態が述べられるという、主題－論述構造をもつ有題文なのである。

一般に、「動作主」と「対象」、「受け手」、「経験者」など、二つ以上の個体が関与する事象の伝達においては、特別な情報構造がかぶさらない無標の文構造では、関与する個体のそれぞれに対し、話し手が共感度に従ってどのように優先順位をつけるかによって、話し手の事象全体に対する概念化が異なってくる。「動作主」が関与項の中でより共感度の強いものとして意識される場合には、(22a) のように「動作主」を表わす主格に立つ「主語」が文頭におかれ、事象としてはその「動作主」が引き起こす動作の展開という形で認知され、伝達されるのである。(22a) が共起場面によっては有題文としても無題文としても理解され得ることはすでに述べたが、有題文の場合には、「動作主」としての「主語」が「主題」と重なり、無題文との構造的差異をみえなくさせてしまっている。従来、ロシア語学の中で、無題文といえは専ら明確な構造的特性をみせる存在文のみが言及され、(22a) のような行為を表わす文も無題文として発話される場合があるということが見過ごされてきたのも、この辺の事情によるものであろう。

一方、「動作主」に比べて、「対象」や「受け手」、「経験者」などの方に話し手がより共感を強く感じる場合には、それらの「対象」や「受け手」、「経験者」などが、判断の中心的存在物として話し手によって認知され、それらの個体がおかれている状況——静的状態としての事象の把握がなされるのである。この場合には、「動作主」としての「主語」と、「主題」としての「対象」、「受け手」、「経験者」などが分離し、「主題」が文頭位置を占めることになる。

(23a) の文においても、собака は事象を引き起こすエネルギー源として、統語上は中心的要素としての主格に立つ「主語」として表現されているが、話し手の認知レベルにおける判断の中心は、「対象」として対格によって表現される мою дочь であり、そのことによって собака は文頭位置を мою дочь に譲ることになるのである。

先にみた (20a) に関しても, *требовательность* という, 実際には「動作主」でないものをメタファーによって「動作主」と見立てて, 事象の根源, エネルギー源としての主格表示を受ける「主語」に立て, それによって規定される「対象」として, 人間を指示する名詞 *Наташа* が対格に立てられている。がしかし, 判断の中心的存在として話し手が選択しているのは, あくまで *Наташа* の方であり, そのことによって (20a) の文は動的事象文ではなく, *Наташа* についての属性を規定する, 主題—論述構造をもつ有題文として理解されるのである。

さて, 最後に無題文ということについて, さらに二つの点を付け加えておかなければならない。

まず第一の問題は, 無題文が発話される際の認知プロセスということについてである。一般に, 「何かについて何かを述べる」というのが言語による伝達の基本型であり, あらゆる文が何らかの形でこの型を具現している, ということが言われる。それは人間の認知プロセスが, まず外部世界におけるある個体の存在確認——分類(名付け)——指示に始まり, それについての判断を下す——すなわち個別化というプロセスとして展開する, という事情によってもたらされるものである。とするならば, 無題文というのは, この人間の基本的な認知パターンから外れたものとして捉えなくてはならないのであろうか。

外部世界の事象というものは, 本来的には因果連鎖的に生起するものであり, その中である特定の事象を認知対象として概念化するということは, まず外部世界の中から特定の限定された時空間が切り取られ, その特定の時空間の個別化として, その時空間の枠内で因果連鎖の網から切り取られた事象の生起ということが判断として提示される, という認知プロセスとして捉えることができるのである。このプロセスが文として発話される場合には, 特定の時空間が「主題」として選択され, その中での生起する事象が判断として述べられるという構造をとることとなる。

これまで無題文としてみてきた事象伝達文も, 事象の生起それだけで独立発話として起こることは稀であり, 多くの場合, 時や場所を表わす副詞句が「主題」として文頭におかれる。このような文頭の副詞句を伴わない無題文は, 発話と同時に生起している事象の描写——眼前描写の場合, もしくはすでに起こった事象の場合には, 何らかの形で先行文脈において, その事象が生起した時空間がすでに特定されている場合だけに起こる。いずれの場合も, 話し手, 聞き手双方にとって, どの時空間が指示されているかは共通理解としてすでに特定されており, その意味で, 無題文というのは, 実は「主題」が省略された文として理解することができるのである。

時空間を表わす副詞句がこのように「主題」機能をもつのは, それが直示的機能を有し, 発話時点を中心として誰もが一義的に特定できる概念として機能する, ということと密接な関係があるのである。

第二に, 行為や一時的状態を伝達する文において, 人称代名詞が「動作主」としての「主語」となっている場合には, それらの文は常に有題文となり, 有標の情報構造の影響を受けない限りは, 人称代名詞は「動作主」=「主題」となって文頭位置を占める。それは, 直示機能, または文脈指示機能をもつ人称代名詞は, 一般にすでにその存在が知られている個体を指示するのであ

り、個体の生起そのものを新しい情報として伝える事象伝達文には登場し得ないという事情によるものである。

以上、「主題」という概念をめぐる、主題—論述構造と情報構造は本来的に異なる次元の問題として捉えなければならないということ、そして、情報構造のかぶさらない、無標の文構造においては、「主題」の決定に際して、話し手の共感度による概念間の優先的序列構造が大きく影響しているということを見た。さらには、「主題」と「主語」という二つの概念のかかわりにおいても、性格付け文における「主題」機能をもつ「主語」と、行為や一時的状態を伝達する文における「動作主」の概念としての「主語」という「主語」概念の二面性、そして、行為や一時的状態を伝達する文が有題文となる場合の「主題」と「動作主」の分離という現象、そこから、文頭位置としての「主題」と主格表示を受ける「動作主」としての「主語」という二つの概念間の関係、といったことが明らかになったように思う。

従来、「あらゆる文には、それについて、何かが述べられるところの主語 (subject) と、何かについて述べられたものである述語 (predicate) とが存在する」としてきたロシア語も含めて西洋の伝統文法の定義における「主語」概念とは、実はこれまでみてきたところの「主題」として捉えられなければならない概念であって、「動作主」としての「主語」とは明確に区別されるものである。英語を典型としたヨーロッパの多くの言語では、「主題」概念と「動作主」概念という二つの概念が「主語」という形で重複しており、有題文と無題文の構造的な差異というものがみえなくなっているものであり、そこから上述のような「主語」範疇の規定における曖昧性もたらされてきたと考えられよう。

ロシア語の文構造においては、特に動詞文などでは、同一文内に「主題」として文頭位置を占める斜格の「対象」や「受け手」、「経験者」、「時空間」を設定する副詞句などと、「動作主」としての主格表示を受ける「主語」が存在し、「主題」概念と「動作主」概念が統語上ある程度明示的に構造化されている。にもかかわらず、ロシア語学においても、上述の西欧の伝統文法における subject の一面的定義に引きずられ、さらには、「テーマ」の理解におけるところの不明確さもあいまって、すでに Золотова や Кокорина についての論議のところでもみたように、本来「主題」概念として捉えなければならないものについて субъект という概念をもちだし、それに対して「主題」とは異なる概念として、「意味上の主体」という曖昧な規定をおこなうという混乱を招いているのである。

### 3. 人間の認知プロセスと歴史的、類型学的観点からみた「主語」、「主題」概念

#### 3-1. 言語現象に対する認知プロセスにおける制約とその文法化過程

「主語」、「主題」概念の規定に関するいま一つの根本的な問題は、上で、当面の考え方として、「文」が文法構造のレベル、意味構造のレベル、そして発話組織のレベルという三つのレベルで

観察されるということを見たが、言語現象には、実はこれらの言語の形式的、意味的制約をさらに背後から動機づける、人間の認知プロセスにおける制約というものが存在するという点である。このことは先にもふれるところがあったが、ここで再度この人間の認知プロセスにおける言語現象への制約という問題を、筆者なりにまとめてみたい。

伝達活動は、社会的存在としての人間がその共同活動を構成していく上での不可欠の要素である。ところで、ある人間が他の人間との伝達を可能とするためには、その人間が現実世界、客観的存在の反映として、自己の中に作り出す心的イメージという主観的観念を一般化・普遍化して、再度その観念に現実的形象を与えるという過程が必要である。一般化・普遍化を前提とすることによって、現実的形象は他の人間の認知プロセスにおいても同様のイメージを形成することができるのであり、その一般化・普遍化の役割を担っているのが言語である。

個人における心的イメージへの再度の、一般化・普遍化された現実的形象の付与は、また人間の直観・感性的認識を抽象的な思考へと移行させる。すなわち、人間は自らの周りの環境をどのようにみるか、その環境が自己とどのようなかわりをもつかといった自己の直観・感性的認識を、言語によって一般化・普遍化——客観化し、さまざまなカテゴリーを形成して、知識を蓄え、構造化し、それを自分の前に提示することによって客体として分析する——思考が形成されるのである。すなわち、この外部世界の事物の認識、概念化、構造化という作業——思考の形成を本質的に支えているのがまさに言語なのである。

そしてこの思考の形成によって、伝達活動そのものも単なる自己の即物的な欲求の表明といった段階から、人間の思考の交換としての高度の精神的な次元でのコミュニケーション活動まで幅広く現れるようになり、それによってまた、人間の認識活動は無限に広がり、それは、単に空間的のみならず、時間的にも広がっていくのである。

このように、人間が外部世界を前にしたとき、それを概念化・構造化して認識し、そして伝達するといった一連の過程が、まさに言語を道具とした一般化・普遍化という作業に支えられているのであるが、しかしながら重要なことは、一定の記述されるべき外部世界と、一般化・普遍化の過程の所産としての言語の表現形式が一对一の関係で直接的に対応するわけでは決してないということである。現実の世界に関する情報は無限であっても、それを理解していくわれわれの認知能力には制約があり、人間の認知というフィルターを通して、その無限の状況は一定の枠の中に概念化、抽象化され、有限の要素によって記号化され、言語として表現されるのである。外部世界、経験といったものは手つかずのまま与えられるのではなく、まさに人間の認知プロセスによって再構成されるのであり、そこでは同一の状況に対しても、異なった概念化、構造化が可能であり、それによって異なった表現形式が用いられるということがでてくる。そして、この同一の状況に対する異なった概念化、構造化という問題は、まさに人間の認知レベルにおけるところの能力——ある対象を別の概念枠のうちに於いて理解するというメタファー能力の現れなのである。

外部世界を理解していく場合に、まず日常世界の具体的な対象を理解する概念枠を基礎に、それを投影・拡張することで抽象的・複合的な世界にかかわる知識を理解することが可能になる。そこでは、数少ない有限の概念枠というもので、無限の極めて多様な事物に対処することとなる。そして、どのような概念枠にあわせるかで、さまざまな変異が生まれてくる。

例えば1-1や1-2でみた(2)や(3)のような人間の精神状態を表現する領域においては、特に概念化、構造化のプロセスが各言語、また同一言語内においても一通りではない。すなわち、精神状態の存在・変化には、経験者の一時的特性、または経験者の意図によって左右される状態の出現という概念化のプロセスと、刺激が経験者にある精神状態におくという概念化のプロセスなどがあり、それぞれの状況において、いく通りかの因果関係の概念化ができ、話し手がどの概念化を選ぶかによって、言語における表現形式もまた異なってくるのである。また、(4a)と(4b)における град の主格、造格という形態的な格表示の差異も、この語によって表わされている存在を自律的な存在と認めるか否か、その存在に内在的な力を認めるか否か、といった概念化のプロセスの差異を表わしていると理解できる。

すなわち、外部世界の真理条件と言語の表現形式との対応においては、複数の真理条件的な意味機能が一つの表現形式によって、また一つの意味機能が複数の表現形式によって具現されるという、多義的・多形式的関係が存在しているのであり、日常言語に基本的に同じ状況ないしは事態の伝達を可能とする様々な表現が存在するのは、外部世界に対する人間の認知プロセスにおける概念化の差異を反映しているのである。

このように考えてくると、言語現象というのは、一見したところ形式の体系からなる自律的な記号系として限定され、形式的な制約によって個々の現象の記述・説明がなされるようにみえるが、言語現象の背後には、まず形式の制約を動機づける意味的な制約が存在し、さらに、この形式と意味の制約は、認知主体の認知プロセスにおける制約によって動機づけられているということになる。このようにして、人間の認知レベルにおけるメタファー能力を基盤とした、具象から抽象へという概念領域間に架けられた橋梁的な意味拡張のプロセスは、やがて慣習化のフィルターを通して文法構造として形式化され、語の意味の拡張、構文の創造性という形で人間の思惟の発展のプロセスは、歴史的な言語における文法構造の変遷に反映されるのである。

1-2や1-3でみたロシア語におけるいわゆる「斜格主体」を伴う「無人称文」という問題についても、古英語から中英語の初期にかけて、me happeth, me wondereth などの「主語の主格」の現れない構文が広く用いられていたように、古い時期のゲルマン語やロマンス諸語に非人称動詞と、それに基づくいわゆる「無主語」構文が数多く残されていたこと、さらに遡って、ラテン語などでも、知覚、感情などを表わす動詞では、その関与者を表わす語の格形態は、主格ではなく、与格ないし対格であったこと、そしてさらには Климов が指摘しているように、能格構造諸言語において、知覚や感覚、感情、必要性、可能性、願望などを表わす「情緒動詞」と呼ばれる動詞群が、「情緒構文」という独自の構文を形成しており、例えば、コーカサス諸語の



バツ語やレズギ語では、それらの動詞が情緒主体を表わすものとして与格の名詞を支配し、ナフ・ダゲスタン諸語では「情緒格」という専用の格の存在を要求し、さらに、北米諸語やパプア諸語のように、情緒的行為の主体を表わす独自の人称接辞を有している [13: 57, 71-72]、といった事情を、その歴史的、類型学的背景として考察しなければならないであろう。すなわち、ロシア語における「斜格主体」を伴う「無人称文」というものは、ロシア語にのみみられる特殊な文構造ではなく、感覚、感情など不随意的な行為の「情緒主体」を、本来の意味での「動作主」を表わす能格や、「状態の担い手」を表わす絶対格、またそれらが収斂されたものとしての主格ではなく、いわゆる「経験者」という範疇に属するものとして与格やまた独自の「情緒格」、人称接辞として形式化するという、歴史的・類型的な概念化の一つの流れの中にあるということができよう。<sup>(11)</sup>

このように、「主語」、「主題」というものがそもそも何であるのか、そしてそのような概念を規定することが、ロシア語の、ひいては言語一般の実質的な記述・説明にとってそもそも意味のあることなのかどうか、ということについても、以上述べてきたような人間の認知プロセスにおける言語現象に対する制約——概念枠の拡張にともなう、多様な概念化の可能性とその文法構造への形式化、さらには、人間の思惟の発展のプロセスを反映したところの、諸言語の歴史的・類型学的観点からの、統語的・形態論的な文法化過程の様式上の差異、という問題の中にその本質的な解明の糸口が見出されねばならないであろう。

### 3-2. 歴史的、類型学的観点からみた「主語」、「主題」概念

以上のような観点から「主語」、「主題」というものを考察しようとするときに、КЛИМОВ がその一連の著作で展開している能格諸言語、及び、その前段階に位置付けられている活格言語類型<sup>(12)</sup>に関する考察 [13] [14]、そして松本克己氏が提出したいわゆる「主語解体論」[50]は、多くの意味で示唆に富んでいる。

松本氏は、西ヨーロッパの諸言語（氏は、B. Whorf の用語を使って Standard Average European = SAE（標準ヨーロッパ語）と呼んでいる）の成立に関する、接触による集約的過程を考察して、「ヨーロッパ標準語 SAE」の「主語」は発生的にみて、談話機能上の「主題」、名詞の格の消失を補う「代用主格」、そして動詞の人称語尾に代わる「人称＝動作主（主役）標示」という三つの側面をもってると結論している。すなわち、古い印欧語で、語順、名詞の格標示、そして動詞の人称標示という違った手段によって文法化されていた「主題」、「主格」、「動作主」という三つのカテゴリーは、SAE においては、格組織、そして動詞の人称語尾の消失にともなって、いわばその代償として成立した統語的カテゴリーとしての「主格主語」という義務化された動詞の前の成分に収斂され、分ち難く融合してしまっているということである。現代の主語論の中で、「主語」を本来的に多面的、複合的な現象とみて、「主語」というものを固定的カテゴリーとして捉えるのではなく、連続的な変異を内包する柔軟な概念として捉え、普遍文法

の立場から世界の諸言語の統語現象の中に「主語」を認めようとする、いわゆる「主語プロトタイプ論」<sup>(13)</sup> に対し、松本氏は自らの立場を「主語解体論」と名づけている。

一方、Климов の一連の著作においては、能格言語類型、及びその前段階に位置するとされる活格言語類型の全体像が提示されており、特に、各言語類型の構造的進化発展の基本的傾向の考察を通して明らかにされている、これらの言語類型の能格化、及び主格化過程という見解は、主格言語類型の諸言語の各レベルにおける事象の歴史的な起源を分析する上で、極めて重要な示唆を含んでいる。<sup>(14)</sup>

Климов においては、能格言語類型の前段階と推定されている活格言語類型の諸言語では、能格類型や主格類型の諸言語に特徴的である主体原理と客体原理の二項対立ではなく、活性と不活性の原理 (активное и инактивное начала) の対立が、その構造全体の基盤と考えられている。そのことはまず、名詞の活性類と不活性類 (人間、動物、樹木、植物とその他のもの) という二項分類に現れる。また動詞も、伝達される行為が客体を有するか否かではなく、活性か不活性かという特徴によって分類され、活性類名詞の指示対象が行なう行為、運動、出来事等を伝達する「活格動詞」(активные глаголы) と、不活性類名詞の指示対象と相関する状態、性質ないしは特徴を表わす「状態動詞」(стативные глаголы) という対立原理がみられるのである [14: 55, 83, 85]。さらに形態レベルにおいても、動詞述語の活格と不活格の二系列の人称接辞の対立とその曲用パラダイムの不均質性 (活格動詞が完全パラダイムであるのに対し、状態動詞は「欠損」パラダイムである)、名詞曲用がある場合には (それは非常に限られた言語にのみみられるとされているが)、そこでも活格と不活格の相関が特徴づけられるとされている [14: 132-137]。

動詞の活格系列の人称接辞は、活格動詞が表わす行為の主体を表わすのに対し、不活格系列の人称接辞は、活格動詞が伝達する行為の客体、及び状態動詞が表わす状態の主体を表わすのであるが [14: 132-133]、前提として、活格系列の人称接辞は常に場の活性的な参与者 (つまり活性類名詞によって指示される対象) とのみ相関して、活格動詞の行為の主体を表わし、一方、行為の客体は不活格系列の接辞によって指示され、その人称指標は不活性的な参与者 (すなわち不活性類名詞が指示する対象) と相関するという事実、また、状態動詞の構造に現れ得るのは不活格系列の人称接辞だけであり、それは不活性類名詞によって指示される状態の主体を表わすという事実がある [14: 95, 137]。

さて、活性原理と不活性原理の対立という組織化原理をもつ基準的な活格構造は、通時的な考察において、その言語構造内で能格性、あるいは主格性の比重が増大していく後期の活格状態へと再編されていく過程が明らかにされている [14: 171]。

それはまず動詞の語彙化原理の変化に現れ、活格動詞と状態動詞の対立が弱化し、以前には構造的に単一であった語彙を、活格動詞としても状態動詞としても扱い始めたり、また活格動詞が状態動詞の活用に移行したり、その逆の現象が現れ、活格動詞は時の経過とともに次第に他動詞と自動詞に分裂し、一方、状態動詞は完全に自動詞に再編されるのである [14: 173-178]。

活格動詞と状態動詞の対立の再編に並行して、活格系列と不活格系列の動詞人称指標にも二通りの変化傾向が現れ始める。第一の傾向は、活格系列と不活格系列という人称指標の対立が、専ら他動詞的行為の主体を表わす能格系列と、非他動詞的行為と状態の主体を表わす絶対格系列、という人称指標の対立へと近づくような機能的変化をみせる過程である。第二の傾向は、両系列の動詞人称接辞を新しい純主體的な機能をもった一連のものへと中和していく過程、あるいは本来的な主体系列と客体系列の対立の形成過程である [14: 182-183, 192-197]。名詞形態においても、活格と不活格の対立が次第に除去され、能格と絶対格、あるいは主格と対格が形成されるという事実が追跡される [14: 311]。

以上述べてきた活格類型の構造的再編過程は、その底流に本質的には、主体原理と客体原理の対立が増大していくという一つの過程が存在しており、それが具体的には言語構造の能格化、あるいは主格化という二つの方向で実現されるのであるが、それは決して直線的な置換ではなく、逆に活格構造の活性と不活性という対立原理は、能格あるいは主格構造のそれぞれの主体－客体の対立原理と共存しながら、言語構造の様々なレベルに影響を与え続けていくとされている [14: 253-254, 311]。

さて、能格構造言語に関しては、周知の如く、動詞は主に専用派生接辞による接辞化によって他動詞と自動詞類に分けられ、他動詞は能格構文を、自動詞は絶対構文を形成する。そこでは動詞の能格系列と絶対格系列の二系列の人称接辞、そして名詞曲用パラダイムにおける能格と絶対格の対立が存在し、能格系列接辞及び能格は、能格構文における他動詞的行為の主体を指示する名詞と関連し、絶対格系列の接辞及び絶対格は、能格構文における行為の客体を表わす名詞、及び絶対構文における自動詞的行為又は状態の主体を指示する名詞と関連する、といった能格類型としての基本特徴がみられるのである。ところで、これらの能格類型言語の基本特徴は、その言語類型内部の歴史的な発展過程という角度で捉えるとき、そこに、「動詞」型から「混合」型へ、「混合」型から「名詞」型へという段階性が仮定できるとされる。すなわち動詞形態における能格系列と絶対格系列の人称接辞の対立の弱化に伴い、それを補うものとしての名詞成分における能格と絶対格の対立が実現され、さらに「名詞」型への変換は、能格系列と絶対格系列の動詞人称接辞の対立の完全な消失——機能的に単一の人称指標として成立していく過程を表わしているのである [13: 166-168, 177]。

このような能格構造の歴史的発展における主導的な役割を果たすのが、他動詞と自動詞間の語彙素の対立が弱まるという傾向であり、そのことが能格系列と絶対格系列の人称接辞の中和化、他動詞の自動詞としての使用、直接補語の省略といった過程に現れているのである。そしてこれらの過程は、さらに名詞成分における能格と絶対格の機能の混交をもたらし、そこでは単一の主格の形成が実現されるのである。それはある場合には、能格が次第にその独自の意味内容を消失し、主格の変種たる地位を獲得するという過程として観察され、またある場合には、「主体機能」を付与された絶対格が主格の構造的基礎となる過程として観察されるのである [13: 191]。

以上のような活格類型と能格類型, 主格類型組織間の歴史的な再編過程の事実は, そこにさらに各類型における統語組織の変遷を重ねあわせてみると, 非常に興味深い事実が浮び上がってくることに気づく。

能格構造の言語における文の文法的構成組織は, 二つの主成分をもつ二肢文構造を特徴としており, その主成分を Климов は「主語」, 「述語」という伝統的統語論で使われている概念によって次のように定義している。

《Сказуемое во всех конструкциях предложения рассматриваемых языков может быть, очевидно, определено как главный член предложения, грамматически независимый от других членов и обычно представленный глаголом. В свою очередь подлежащее здесь можно охарактеризовать как главный член предложения, грамматически зависимый только от сказуемого, составляющий второй конструктивный центр предложения и обычно представленный именем существительным или местоимением.》[13: 78-79]

「述語は考察されている諸言語（能格諸言語のこと——筆者註）のあらゆる構造において, 恐らく, 文法的に他の成分とは独立し, 普通は動詞によって表わされる文の主成分として定義できる。一方主語の方はここでは, 文法的に述語にのみ従属し, 文の第二の構造的な中心をなし, 普通, 名詞や代名詞によって表わされる文の主成分として特徴づけることができる」

ただ, 単人称活用が典型的な, 自動詞を述語とする絶対構文の「主語」の認定については問題がないとしても, 述語と統語的に関係する複数の名詞成分が存在する能格構文や情緒構文, 所有構文においては, その何れを「主語」とみなすかについてはその解釈が一樣にはいかない。この点に関しての Климов の記述は, 主格構造言語の「主語」概念を考察する上で, 極めて重要な点を含んでいるので, 以下少々長くなるが引用することにする。

《Единственно релевантным критерием соотнесения одного из имен в любом предложении эргативной типологии с подлежащим следует признать его роль как второго (после сказуемого) конструирующего предложение центра. Комплекс формально-грамматических признаков довольно определенно указывает на то, что в языках эргативного строя имеет место «тенденция превратить в подлежащее тот член предложения, который обозначает субъект действия, выраженного переходным глаголом, и который, по крайней мере в большинстве языков с эргативной конструкцией, представляет собой имя в одном из косвенных падежей». [18: 216] Эти признаки: а) линейные отношения слов в предложении, б) интонационный контур предложения и в) морфологическое оформление слов.

Весьма показательна в рассматриваемом отношении соотносительная позиция подлежащего и сказуемого в предложении. Ведущая закономерность, отражающая максимальную

синтаксическую автономность подлежащего по сравнению с другими именными членами предложения и, в частности, с прямым дополнением, состоит в языках эргативного строя в относительно свободной и максимально дистантной его позиции по отношению к сказуемому. По-видимому, существуют даже основания констатировать здесь правило, согласно которому подлежащее и сказуемое тяготеют к дистантному расположению в составе предложения: если первое из них тяготеет к маргинальной левой позиции, то второе — к маргинальной правой ...

Другим показателем автономности подлежащего эргативной и иных конструкций предложения эргативной типологии, также не разделяемым прямым дополнением, является наличие характерной границы ритмико-интонационного контура, пролегающей между ним (/ / группой подлежащего) и сказуемым (/ / группой сказуемого).》 [13: 79-80]

「能格類型の任意の文において、名詞の一つを主語と関連づける唯一の関与的な指標は、名詞の文を構成する第二の中心としての役割である。形式文法的な特徴の集合は、能格構造の諸言語においては、『他動詞によって表わされる行為の主体を意味し、少なくともほとんどの言語の能格構文で、斜格の一つとしての名詞で現れる文の成分を主語とする傾向』が起ることをかなりはっきりと示しているのである。これらの特徴は、a) 文における語の線形上の関係、b) 文の音調型、そして b) 語の形態的な形式 である。

これらの関係において、文の主語と述語の相関的な位置というものが極めて典型的な形として現れるのである。主語が他の名詞成分、特に直接補語に比して最大限の統語的自立性をもつということを反映している主要な法則性は、能格構造の諸言語においては、主語が述語に対して相対的に自由な、そして最も遠い位置を占めるという点にある。恐らくそこには、主語と述語が、文の構成において離れた位置におかれる、という規則を確認する種々の理由さえ存在するであろう：もし前者が左端の位置におかれようとするときには、後者は右端へおかれる傾向があるということである。(…)

能格類型の能格構文やその他の構文における、主語の自立性というものに関する、やはり直接補語にはみられない別の指標は、主語（主語グループ）と述語（述語グループ）の間に引かれる、特徴的な韻律・音調的な境界線の存在である。」

このような論拠に従って、能格構造言語の各構文の語順を示す構造式は以下になるとしている。

|      |                           |
|------|---------------------------|
| 能格構文 | $S - O' - V_{trans}$      |
| 絶対構文 | $S - (O'') - V_{intrans}$ |
| 情緒構文 | $S - O'' - V_{affect}$    |

所有構文       $S - O'' - V_{\text{poss}}$       ( $O'$ は直接補語を,  $O''$ は間接補語を表わす) [13: 94]

活格構造言語の語順も基本的には能格構造言語の語順と一致しているとして,

活格構文       $S - (O'') - (O') - V_{\text{act}}$

不活格構文       $S - (O'') - V_{\text{stat}}$

情緒構文       $S - (O'') - V_{\text{affect}}$

という構造式が提示されている。 $(O')$ は行為対象や行為方向を指示する近い補語を,  $O''$ は状況語的な意味をもつ遠い補語を表わすとされている。ただし, 活格構造言語においては, 能格構造の場合とは異なり, 補語はいずれの場合も任意成分であることが明記されている。) [13: 219] [14: 308]

さて, Климов において「主語」, 「述語」, 「直接補語」等といった概念で定義されている活格構造, 能格構造の統語組織の成分記述について, 例えば Martinet や Пирейко が, 主格構造言語の研究を射程した伝統的統語論で用いられているような概念を, これらの諸言語の構造記述に利用することに反対している旨が述べられ [35] [19: 39], また, これまでの研究においては, 「行為主体」- 「行為客体」, 「行為主」- 「被行為主」, 「行為主体」- 「状態主体」などの用語も使われてきていることが指摘されている。ただこれらの見解については, Климов は, 伝統的な統語論で使われてきた諸概念の外延を広げ, 「主語」が形態的に不変であるという考え方をやめて, 斜格形や専用の能格形での名詞成分も「主語」に含めるという立場をとれば, 伝統的な用語法を継承して能格言語や活格言語の構造記述に用いることに何等問題はない, という立場をとっているのである [13: 73-78]。この Климов の見解は, 先にみたところの「主語プロトタイプ論」の流れをひくものであるということができであろう。

しかしながら, 上でみた彼の「主語」概念の定義, а) 文における語の線形上の関係, б) 文の音調型, そしてв) 語の形態的な形式 は, すでにふれるところがあったが, 論理学においてアリストテレス以来受けつがれている命題の二分法 — 判断の対象物である事象の中から, ある存在物を取りだし, 二項を設定する — に基づいた, その判断の対象の中心的存在物, すなわち西洋の伝統文法でいうところの「論理的主語」 — 現在の言語学でいうところの, 先の 2-1 で定義した「主題」の概念と重なる部分があることに気づかないわけにはいかない。Климов は別の箇所, Кашнельсон の, 活格類型の文構造においてその「主語」を「テーマ」(文において述べられること)として定義することは, 「主語」を文の現実区分と直接関連づけるものであり, 現実に対応しているわけではない, という見解を引いているが [12: 61-63] [14: 116], 実はこの Кашнельсон の「テーマ」の理解自体が, 2-1 でみたように, 「主題」と旧情報を担う要素を同一視するというプラーグ学派における混乱をそのまま引き継いだものであり, そのことは, Климов 自身の次のような記述にも明らかになっているように思える。

《Как известно, в условиях более или менее развитой морфологической системы, обычно характеризующей языки эргативного строя, на порядок слов в предложении не накладывается жестких ограничений, вследствие чего здесь нередко используется возможность различной топикализации высказывания посредством его изменения ... Однако поскольку речь идет о стилистически нейтральной и, следовательно, типологически доминирующей норме словорасположения, то, как правило, соответствующие закономерности устанавливаются вполне адекватным образом без особых затруднений, что особенно касается изолированных предложений.》[13: 92]

「周知のように、一般に能格構造の諸言語を特徴づける、多少とも発達した形態組織の条件下では、文における語順は厳しい制限が課されているわけではなく、その結果、ここでは語順を変更することでの、発話の様々な話題化の可能性というものがしばしば利用されるのである。(…)しかしながら、ここで言っているのは、文体的にニュートラルな、従って類型学的にみて支配的な語順の規範のことであり、しかるべき法則性（能格構造言語に特徴的な語順における法則性——筆者註）は、原則として、特に個別的な文に関しては、さして困難を伴うこともなく、完全に適正な形で設定されるのである。」

このようにみえてくると、ロシア語における「通常、名詞（相当語句）の主格で表わされ、述語と数、人称において呼応する」という文法構造のレベルで定義されている「文法的主語」というものは、それを歴史的・類型学的観点からの統語的・形態的な文法化過程の結果としてみるならば、そこには、まず根源的には活格（多くの場合には活格系列の人称接辞）に相関する、事象を引き起こす意志をもつところの、人間を中心とした「動作主」を指示する名詞成分としての統語的中心要素を見出すことができるのである。それは、事象の根源的要因として、事象そのものを伝達する述語と並んで、統語範疇の核となる要素となるのであるが、それが典型的には文の左端の位置——すなわち文頭におかれるということは、その背後に、言語の人間中心主義、及び外部世界の図像的な概念化ということが反映していると考えられる。すなわち、人間中心にできている言語で、その人間中心的な要素が軸となって展開される事象が伝達される際には、事象の根源たる「動作主」と、その「動作主」によって引き起こされる事象という図像的な語順形式が最も自然であるという事情があると言えるだろう。

第二には、活格構造言語の不活格構文において、不活格（より多くの場合不活格系列の人称接辞）と相関する、「状態（より始原的には性質、特徴を表わすと考えられる）の担い手」を指示する名詞成分を、その「文法的主語」のもう一つの発生的側面として見出すことができる。そこでは、「動作主」が関与する、外部世界に客観的に生起する事象を伝達する場合——そこでは「動作主」は話者が恣意的に選択すべきものではなく、客観的事象の一部として既に与えられて

いる——とは異なり、何を判断の対象とするかは、発話主体の恣意的な選択に任されているのである。このことについては次稿以降においてより詳しく述べることとなると思うが、結論的にいうと、まさにこの構文において、判断の対象である事象の中から中心物を取りだし、それについて判断を下す、という命題の二項性が具現化されており、その判断の対象の中心としての名詞成分は、必ず文頭に位置して、典型的な意味での「主題」という機能を担っているのである。

一方、すでにみたように、ロシア語におけるいわゆる「斜格主体」を伴う「無人称文」も、起源的に「情緒構文」を仮定するならば、<sup>(15)</sup> そこにおいて、「経験者」の範疇に属するものとして、与格や独自の「情緒格」、人称接辞に相関する名詞成分が、やはり文頭の位置におかれ、「主題」としての機能を担っているということを継承したものとして、ロシア語の「斜格主体」の文頭の位置ということが説明されるであろう。

以上、あくまで序論の段階としての仮定であるが、これまでの議論を要約すると、まず第一に、ロシア語において、文法的カテゴリーとしての「主語」は、歴史的、発生的にみて、そこに本来的な意味での、事象の根源的要因としての「動作主」標示と、判断の中心、発話の出発点としての「主題」の機能の二つをみることができ、その二つの機能が収斂したものとして「主語」を理解し得るのではないかということである。第二には、ロシア語において「意味上の主体」として理解されてきた、文頭要素としての「斜格主体」も、そこには不随意的行為の主体として、「経験者」という範疇に属するものとしての格標示を受けつつ、「主題」機能を担うものとして、文頭の位置を占める成分とみなすことができるのではないかということである。

次稿以降、言語現象の基盤となる、認知レベルにおけるところの概念化の類型を基礎として、ロシア語の文の構造的な類型化を行い、個々の類型における詳細な分析を行なう中で、歴史的、言語類型学的な視点も踏まえて、ロシア語の「主語」、「主題」という概念について上で立てた大枠としての仮定を検証することとしたい。

## 註

- (1) ただし Ахманова の辞書では、上述の明確な統語的カテゴリーとしての подлежащее は時に грамматическое подлежащее (文法的主語) とされ、それ以外に、認識や心理的意義において最初からイメージされるものとしての психологическое подлежащее (心理的主語)、文において、それについて何かが語られるものとしての логическое подлежащее (論理的主語) という概念も存在する旨記述されている [3: 330]。
- (2) 学校文法などの古い伝統的規定では、《подлежащее — это то, о чем говорится в предложении и что отвечает на вопрос „кто“ или „что“》という [2] の規定に近いものであった [17: 365]。
- (3) [2] [5] [6] [7] [12]等の文献において、同様の субъект の概念規定がみられる。
- (4) 文中のアリストテレスの引用箇所は [26: 181]の訳によった。
- (5) この場合の時や場所の状況語を、これらの文における「意味上の主体」とみなしたり、あるいは、それ



が明示されない「主体」の位置確認をおこなう要素として働くことから、やはりこれらの文には間接的に「意味上の主体」が想定されているとする理解があるが [4: 85-86] [16: 11] [24: 470, 473-474], このような説に対して Кокорина は、一項文という構造的な文法的意味を無視したものであるとして批判している。[15: 16-17]

- (6) ただし、文がニュートラルな（文脈に依存しない無標の）語順の場合についてこういうことがいえるとされている。無標の語順という概念については、後の議論に密接に関ってくる概念であり、2 - 1 で詳しくみたい。
- (7) 特に Firbas, Golková [32], Sgall, Hajičová, Buráňová [39] などにおける伝達のダイナミズム (communicative dynamism) の理論では、伝達される情報の流れの中で、各要素が担う情報上の価値の重要度によって、伝達上のダイナミズムの高低が決定され、「テーマ」は情報量の比較的少ない、伝達上のダイナミズムの低い部分、「レーマ」は情報量の多い——伝達上のダイナミズムが高い部分とされている。
- (8) この用語は尾上 [42] が文の対象的内容を反映したところの「論理的格関係」に対して、発話、表現段階での話し手の意識に基づいた文の各部分の関係を「表現上の断続関係」としたことに従う。
- (9) 叙述の型としての文の類型そのものの二分法は、古くはヴァンドリエスなどの「名詞文」、「動詞文」にもその原型が認められるが、日本語文法の研究では、昭和の初期にすでに、佐久間の「いいたて文」における「物語り文」と「品定め文」の二分が知られており [45], 三尾 [52] や三上 [51] においてもそれが引き継がれ、現代では、益岡 [49] の「属性叙述」と「事象叙述」、またこれらの叙述の類型を概念化のパターンの差として捉える森重 [53] [54] の「現実性判断」と「観念性判断」、内田 [40] の「知覚判断」と「経験判断」などを挙げることができる。いずれの場合も、それぞれの類型が有題文と無題文に対応するということが述べられている。
- (10) ただし、すでに話題に上ったか否か、または話し手、聞き手によく知られている事物であるかどうか、という意味での既知項目、未知項目という概念と、旧情報、新情報という概念はレベルを異にしていることに注意しなくてはならない。旧情報、新情報という概念は、目下の文における情報の重要度に関する概念であり、例えば「太郎を殴ったのは私だ。」においてのように、既知項目が新情報になる文というのはしばしば観察されるのである。この既知項目—未知項目、旧情報—新情報の概念の異同については、久野 [43: 217], 安井 [55: 182-185] を参照のこと。
- (11) 能格諸言語にみられるこの「情緒構文」は、実は能格言語類型の原理から直接説明できるような能格言語の包含事象ではなく、能格言語の前の段階と考えられる活格言語の「包含事象」であるということに関して、山口巖氏の次のような指摘がある。「不随意的な行為を表わす動詞や、活性名詞とのかかわりの深い状態を表わす動詞は、典型的な行為動詞と状態動詞からみれば、それらの中間にある動詞であるということができる。(…) この系列の動詞は、不随意行為や状態を表わしているから、能格言語の随伴事象であった「情緒動詞」と語彙が重なることが多い。能格言語では意味上の自動詞を絶対動詞に分類しているから、これらの自動詞の中からかつての活格と結びついていたものだけを解釈しなおしたのが、情緒動詞であると思われる。もしそうであるならば、能格言語の情緒動詞も、もとは活格言語の包含事象であったということになろう。」 [56: 99-100]
- (12) この用語は、Климов の языки активного строя 及び активный падеж に対する山口巖氏の「活格言語」、「活格」という訳に準じたものである。[56: 90]
- (13) 「主語プロトタイプ論」の立場に立って論を展開しているものに、柴谷 [46] [47], 角田 [48] などがある。
- (14) 以下、Климов [13] [14] の議論に関する引用、紹介については、石田修一訳『一般能格論概説』及び

『活格構造言語の類型学』（いずれも未公刊）を参考にした。

- (15) 山口巖氏は、ロシア語における非人称文等の特異な現象について次のように言及している。「ロシア語は対格言語の原理となっている、主語と述語との緊密な関係を弱め、述語の相対的独立性を強める方向に発展してきたようにみえる。(…)非人称文、不定法文さらには不定人称文の広範な使用も述語の独立性を強めるものであった。(…)少なくとも、ロシア語に散在する特異な諸現象を内容的類型学の立場からみれば、それらは、ロシア語が能格あるいは活格の言語類型の論理を、自らの裡に取り入れた結果であるように、思われてならないのである。」[56: 164-165] これは、ロシア語の能格あるいは活格言語的な性格が、この言語の前段階の言語類型の包含事象の残滓的な現象ではなく、ロシア語が主格言語としての基本的な特徴を既に確立して後に、何らかの理由で能格的あるいは活格的な現象を二次的にもつに至ったという仮定に立つ論であり、ロシア語の類型学的研究が未だ本格的に開始されていない現段階で、この仮定の妥当性について述べる力を筆者はもちあわせていないが、ロシア語の言語構造全般の歴史的な変遷過程の詳細な分析をふまえての論として、非常に興味深い見解であり、今後の論の発展が待たれる。

## 引用文献

1. Адамец П. Порядок слов в современном русском языке. Прага, 1966.
2. Арутюнова Н.Д. Предложение и его смысл: Логико-семантические проблемы. М., 1976.
3. Ахманова О.С. Словарь лингвистических терминов. М., 1966.
4. Бабайцева В.В. Односоставные предложения в современном русском языке. М., 1968.
5. Гак В.Г., Ройзенблит Е.Б. Очерки по сопоставительному изучению французского и русского языков. М., 1965.
6. Гак В.Г. Беседы о французском слове. М., 1966.
7. Золотова Г.А. Очерк функционального синтаксиса русского языка. М., 1973.
8. Золотова Г.А. Роль ремы в организации и типологии текста// Синтаксис текста. М., 1979.
9. Золотова Г.А. О субъекте предложения в современном русском языке// Филологические науки.. 1981. No. 1.
10. Золотова Г.А. Коммуникативные аспекты русского синтаксиса. М., 1982
11. Золотова Г.А. Синтаксический словарь: Репертуар элементарных единиц русского синтаксиса. М., 1988.
12. Кашнельсон С.Д. Типология языка и речевое мышление. Л., 1972.
13. Климов Г.А. Очерк общей теории эргативности. М., 1973.
14. Климов Г.А. Типология языков активного строя. М., 1977.
15. Кокорина С.И. О семантическом субъекте и особенностях его выражения в русском языке. М., 1979.
16. Низяева Г.Ф. Неопределенно-личные предложения в современном русском языке (семантико-грамматическая организация): Автореф. дис. ... канд. филол. наук. М., 1972.
17. Никитина С.Е. Семантика термина «подлежащее» в отечественных и европейских словарях лингвистических терминов// Изв. АН СССР. Сер. лит. и яз. 1979. Т. 38, No. 4.
18. Панфилов В.З. Взаимоотношение языка и мышления. М., 1971.

19. Пирейко Л.А. Основные вопросы эргативности на материале индо-иранских языков. М., 1968.
20. Распов И.П. Строение простого предложения в современном русском языке. М., 1970.
21. Розенталь Д.Э., Теленкова М.А. Словарь-справочник лингвистических терминов. М., 1985.
22. Селиверстова О.Н., Прозорова Л.А. Коммуникативная перспектива высказывания // Теория функциональной грамматики. Субъектность. Объектность. Коммуникативная перспектива высказывания. Определенность/неопределенность. СПб., 1992.
23. Шведова Н.Ю. О соотношении грамматической и семантической структуры предложения // Славянское языкознание. М., 1973.
24. Шведова Н.Ю. К спорам о детерминантах (обстоятельственная и обстоятельственная детерминация простого предложения) // Филологические науки. 1973. No. 5.
25. Aristotelis Categoriae et liber de Interpretatione, recognovit brevique adnotatione critica instruxit L. Minio-Paluello. Oxonii, 1956. [山本光雄訳「命題論」『アリストテレス全集 1』岩波書店, 1971.]
26. Aristotelis Analytica Priora et Posteriora. Recensvit Brevique Adnotatione Critica Instruxit W.D. Ross, Praefatione et Appendice Auxit L. Minio-Paluello, Oxford, 1964. [井上 忠訳「分析論前書」『アリストテレス全集 1』岩波書店, 1971.]
27. Arnauld A., Lancelot C. Grammaire générale et raisonnée. Paris, 1660. (Genève: Slatkine [reprint 1972] ).
28. Bauer J., Grepl M. Skladba spisovné češtiny. Prague, 1970.
29. Beneš E. Zčátek nemecké věty z hlediska aktuálního členění větného // Časopis pro moderní filologii. 1959. Vol. 41.
30. Daneš F. A three-level approach to Syntax // Travaux Linguistiques de Prague. 1964. No.1.
31. Daneš F. Sémantická struktura větného vzorce // Otázky Slovanské syntaxe XI. Brno, 1968.
32. Firbas J., Golková E. An analytical bibliography of Czechoslovak studies in functional sentence perspective. Brno, 1976.
33. Hagège C. La structure des langues. Paris, 1986. [東郷雄二, 春木仁孝, 藤村逸子訳『言語構造と普遍性』白水社, 1990.]
34. Hausenblas K. Subjekty v promluvě // Sesja Naukowa Międzynarodowej Komisji Budowy gramatycznej Języków Słowiańskich w Krakowie, 3-5 grudnia 1969 r. Wrocław, Warszawa, Kraków, Gdańsk, 1971.
35. Martinet A. Le sujet comme fonction linguistique et l'analyse syntaxique du basque // Bulletin de la Société de Linguistique de Paris. 1962. t. 57, fasc 1.
36. Mathesius V. Čeština a obecný jazykozpyt. Prague, 1947.
37. Mathesius V. Obsahový rozbor současné angličtiny na základě obecně lingvistickém. Prague, 1961.
38. Mistrík J. Slovosled a větosled v slovenčine. Bratislava, 1966.
39. Sgall P., Hajičová E., Buráňová E. Aktuální členění věty v češtině // Studie a práce lingvistické. 1980. Vol. 12.

40. 内田賢徳「主語をめぐる助詞の用法区分について」久野 暲・柴谷方良編『日本語学の新展開』くろしお出版, 1989.
41. 『英文法シリーズ』第三集. 研究社, 1972.
42. 尾上圭介「主語・主格・主題」『日本語学』 Vol. 4 (10月号), 1985.
43. 久野 暲『日本文法研究』大修館書店, 1973.
44. 『現代言語学辞典』成美堂, 1988.
45. 佐久間鼎『日本語の特質』育英書院, 1941.
46. 柴谷方良「主語プロトタイプ論」『日本語学』 Vol. 4 (10月号), 1985.
47. 柴谷方良「言語類型論」『英語学の関連分野』(英語学大系6) 大修館書店, 1989.
48. 角田太作「主語, 主格, 主題, 動作者: 文法分析の四つのレベル」『世界の言語と日本語』くろしお出版, 1991.
49. 益岡隆志『命題の文法』くろしお出版, 1987.
50. 松本克己「主語について」『言語研究』第100号, 1991.
51. 三上 章『文法小論集』くろしお出版, 1970.
52. 三尾 砂『国語法文章論』三省堂, 1948.
53. 森重 敏『日本文法ー主語と述語ー』武蔵野書院, 1965.
54. 森重 敏「係り助詞 は・も」『日本文法の諸問題』笠間書院, 1971.
55. 安井 稔『新しい聞き手の文法』大修館書店, 1978.
56. 山口 巖『類型学序説』京都大学学術出版会, 1995.

(1996. 9. 12 受理)